

## II 大腸絨毛状腫瘍の定義

前章でみたように、これまでの文献の中では、絨毛状腫瘍は種々に定義されている。

現在ひろく受け入れられている定義をみると、大腸癌取扱い規約<sup>12)</sup>では“ほぼ全体が狭い間質を有し、分岐することなく基底部分より櫛状に突出する腺腫”を絨毛腺腫の組織学的な定義としている。Morson<sup>48)</sup>は“病巣の80%以上に villous component をもつもの”を villous adenoma と呼ぶべきであるとしている。

一方、さらに詳細に定義した例として、岩下ら<sup>34, 35)</sup>は“肉眼的に表面が絨毛状あるいは微細顆粒状で剖面も絨毛状を呈し、絨毛状突起の厚さは1mm以下、組織学的に90%以上が絨毛状ボタンをとり、絨毛状突起の長さは正常粘膜の厚さの3~5倍以上で、絨毛状突起を覆うのは概ね直線的に配列する高円柱状上皮”といった条件を絨毛状腫瘍の定義として、その病理組織学的所見を報告している。

しかし、肉眼的に典型的な絨毛状腫瘍ではあっても組織学的には多様であり、典型的な櫛状構造を示す部分もあればかなり腺管状の構造を伴う部分もみられる。また、組織標本の薄切された方向によっても多様な構造が現れる。そのため、病変の何%が絨毛状構造を示すというような判断は、実際にはかなり曖昧で難しい。

そこで、本研究では、腫瘍の肉眼形態とは無関係に“組織学的に腫瘍全体のおよそ半分以上に絨毛状構造がみられるもの”を絨毛状腫瘍と定義した。なお、典型的な絨毛状構造とは、腫瘍上皮が細長い間質を軸として粘膜筋板から正常粘膜の厚さ以上に垂直にのび、櫛状を呈する構造をいうが(図3)、それら絨毛に扇状の分枝のみられるもの、絨毛の上皮が間質側に内翻して小腺管を形成しているもの、あるいは絨毛状構造に腺管構造が混じり乳頭状を呈するものでも、病巣全体として絨毛状を呈しているものは絨毛状構造とした(図4, 5, 6)。

絨毛状構造が病巣のおよそ半分以上を占めると見做されたものをすべて絨毛状腫瘍として扱ったため、今回検討した中には大腸癌取扱い規約あるいは

Morson のいうところの腺管絨毛腺腫 tubulo-villous adenoma も含まれている。

なお、ここで絨毛状腫瘍を定義するまでは、絨毛状腫瘍と絨毛腺腫という言葉と同義に使用してきた。絨毛状腫瘍は、それを腺腫とする立場からは絨毛腺腫とよばれ、大腸癌取扱い規約やWHOの分類もその立場をとっている。しかし、その良性悪性の性質が必ずしも明らかではない現段階では、良性悪性判断の含まれない“絨毛状腫瘍”という呼称がよいと思われるため、これを使用する。

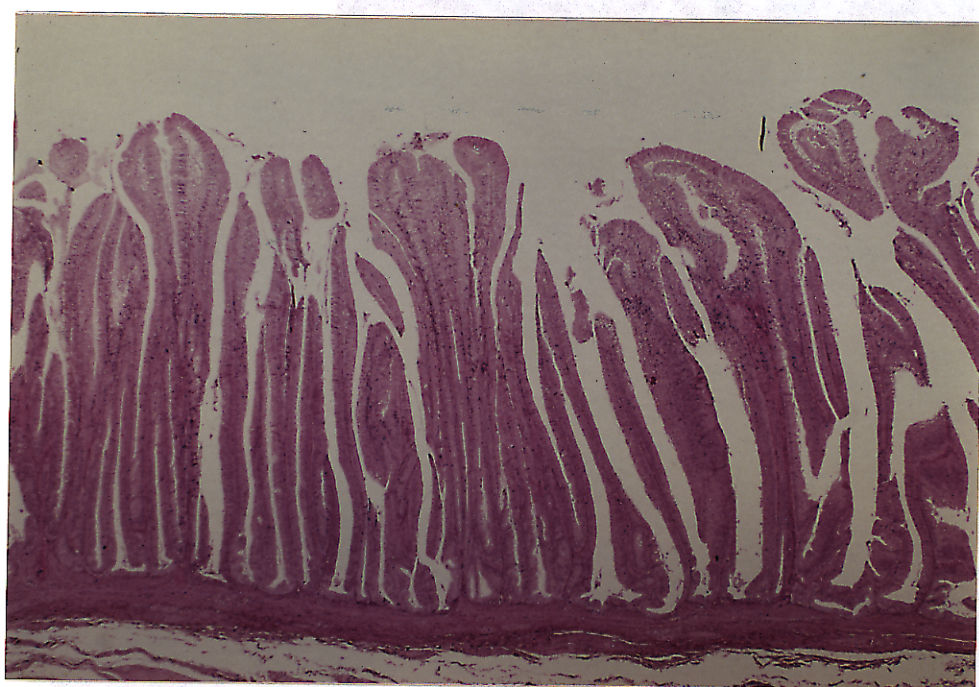


図3 絨毛状腫瘍の典型的な櫛状構造。（青梅市立病院 P-880354）



図4 絨毛状腫瘍の絨毛に枝分かれ様の構造がみられる。

(土浦協同病院

ON-728)

(→)

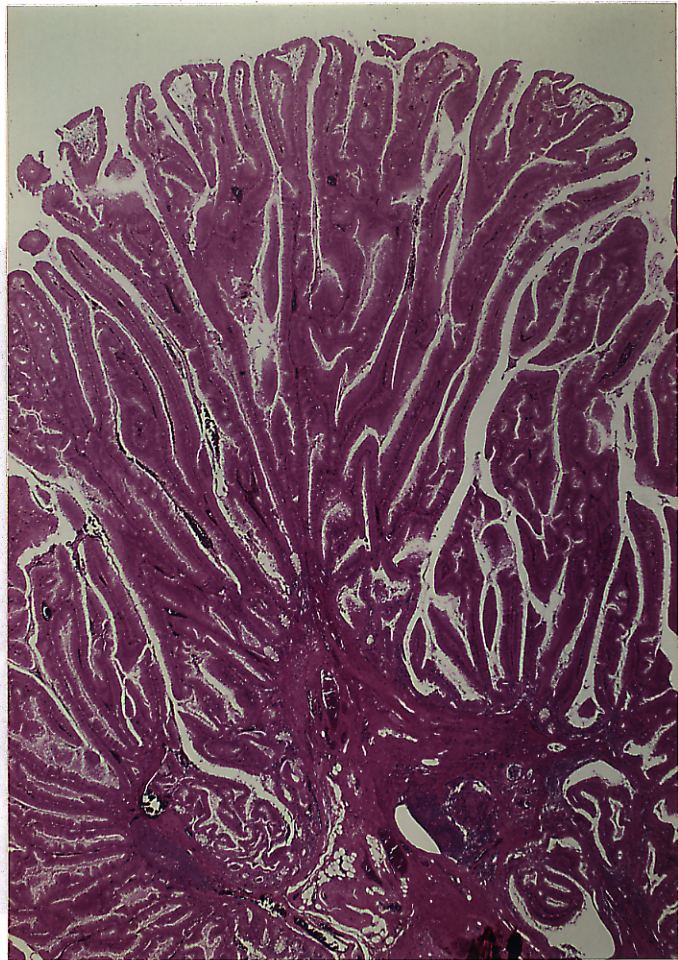
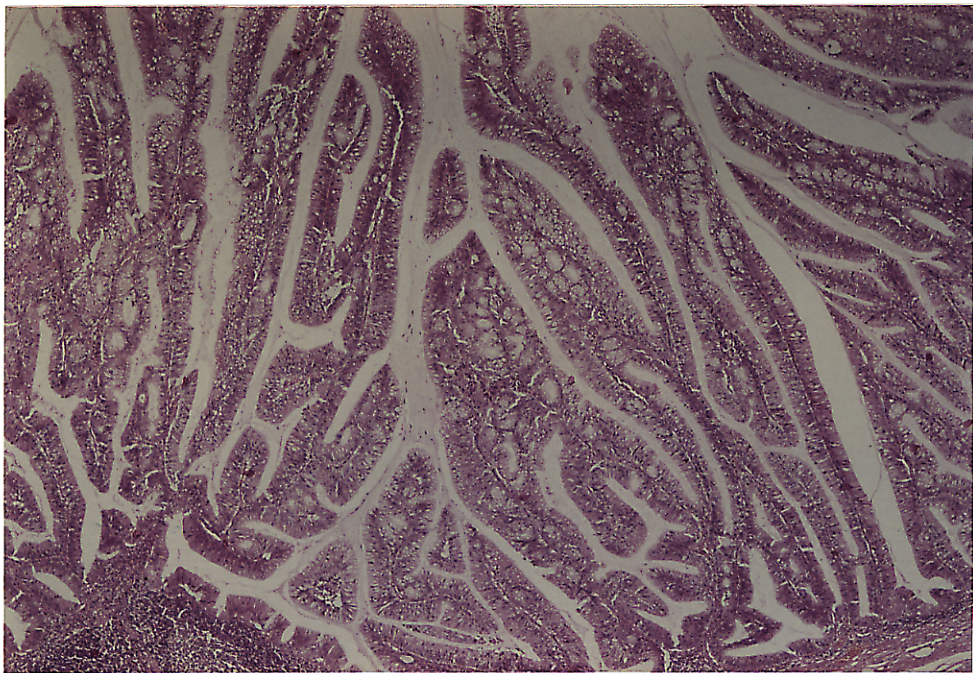


図5 絨毛状腫瘍の絨毛の上皮が間質側に内翻して小腺管を形成している像が多数みられる。

(大宮市医師会病院

OS-1237) (↓)





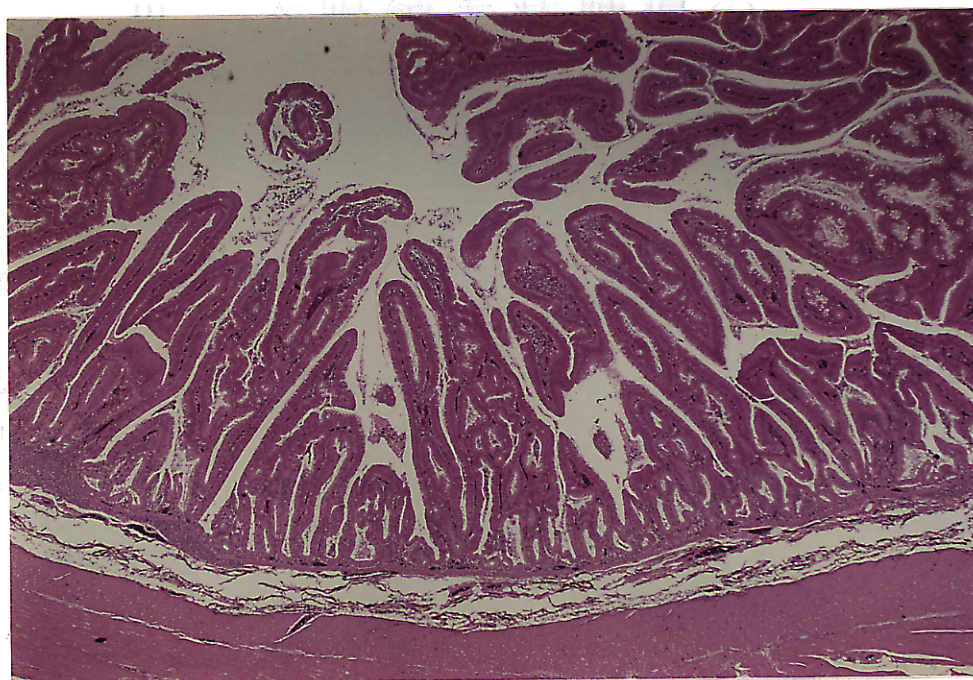


図6 絨毛状腫瘍の絨毛構造に腺管構造が混じり，乳頭状を呈している。  
(土浦協同病院 0N-728)